

## 陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (7)

－「ケア」の視点を取り入れた道徳科における ESD 教材－

糸 綾香

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 英語教育専修)

森本珠美怜

(奈良教育大学 英語教育専修)

佐野宏一郎

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 理科教育専修)

鈴木奈津・濱松佳生

(奈良教育大学 文化遺産教育専修)

中澤静男

(奈良教育大学 教育連携講座)

### The Seventh Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City

－ESD through moral education including the view of Care, Caring－

Ayaka KUME

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education)

Sumire MORIMOTO

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Kouichiro SANO

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education)

Natsu SUZUKI, Kai HAMAMATSU

(Undergraduate Student, Nara University of Education)

Shizuo NAKAZAWA

(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)

**要旨：**陸前高田市文化遺産調査を実施して6年目となる。平成23年に起きた東日本大震災において多大なる被害を受けた陸前高田市であるが、かさ上げを行った旧市街地に市立図書館や商業施設が建設されるなど、物質的な復興は順調に進んでいるように見える。しかし、そこに住む人々の「心の復興」は完全とは言えず引き続き支援が必要である。本稿では「心の復興」をテーマとし、持続可能な開発に不可欠な概念として挙げられる「ケア（ケアリング）」の要素を取り入れた道徳科における ESD の学習を提案する。

**キーワード：**持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

心の復興 Reconstruction of one's mind

ケア（ケアリング）Care, Caring

道徳教育 Moral Education

### 1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な開発のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで6年目となる。今年度は、本学教員2名、大学院教育学研究科修士課程2名、

学部生3名からなる調査チームで、2017年9月24日から27日にかけて、文化財科学や美術史学の知識を活用した文化遺産調査班と、ESD・防災教育の研究開発班の2班に分かれて活動を行った。今回の調査の主な日程は、表1の通りである。

本稿では災害公営住宅内の中田交流プラザや陸前高田市立図書館などでの地域住民への聞き取り調査や、過去の陸前高田市文化遺産調査における被災者の方々への聞き

取り調査の結果を中心に、道徳科における ESD 教材について報告する。

表 1 4 日間の日程

	ESD・防災教育班	文化遺産調査班
24 日	・毛越寺、中尊寺金色堂（平泉町）等を拝観	・中尊寺願成就院での石造宝塔、観自在王院跡オンドウ仏等の三次元計測
25 日	・陸前高田市教育委員会へ表敬訪問	
	・気仙沼市教育委員会にて聞き取り調査	・気仙沼市浄勝寺にて釈迦牟尼の調査
26 日	・住田町の人々に聞き取り調査 ・災害公営住宅内中田交流プラザ、陸前高田市立図書館にて聞き取り調査	・住田町向堂観音堂にてレプリカ授受 ・陸前高田市平栗福寿庵にて調査
27 日	・栗原市有壁五輪塚にて三次元計測 ・村田町やま商記念館を拝観	

## 2. 陸前高田市の現在の復興状況について

9 月 25 日に陸前高田市教育委員会を訪問し、教育次長の戸羽良一氏より、陸前高田市の震災復興の取り組み状況について説明していただいた。

まず人的被害の状況であるが、陸前高田市では 1759 名が死者・行方不明者となっており、これは市の人口の 7.3% にあたり、市町村として最大の被害である。死者・行方不明者の被災場所を分析したところ、海が見えない河川の流域での被害が大きく、津波が河川を逆流していったものと思われる。

現在陸前高田市では、平成 28 年 3 月に「陸前高田市震災復興実施計画」を改定し、「災害に強い安全なまちづくり」、「快適で魅力のあるまちづくり」、「市民の暮らしが安定したまちづくり」、「活力あるまちづくり」、「環境にやさしいまちづくり」、「協働で築くまちづくり」の 6 つのまちづくりの基本方向を定め、各種の復興事業を展開しており、戸羽氏から、「災害に強い安全なまちづくり」に関わる水門整備事業と防潮堤整備事業について、「快適で魅力あるまちづくり」に関わる防災集団移転事業の説明があった。

まず「災害に強い安全なまちづくり」についてである。陸前高田市では、今回の津波被害を教訓にまず防潮堤整備事業に取り組んでいる。日本地質学会の調査によると、陸前高田市における津波浸水高は 18m である。<sup>1</sup> もちろんこの値は最大遡上高を表しており、実際の遡上高は地形の影響を受けるため場所による違いがある。陸前高田市では、河川における防潮を目的に 12.5m の高さの水門を河口付近に建設したほか、津波被害の大きかった広田湾に面する高田地区には、津波の威力を低減させるために海側の高さ 3m の防潮堤に加えて、高さ 12.5m の巨大防潮堤を建設した。しかし、防潮堤が完全に津波を防ぐとは想定しておらず、あくまで避難のための時間稼ぎであり、避難訓練などの減災対策は今後も継続して実施していく方針である

ことを強調されていた。

次に「快適で魅力あるまちづくり」については、政府が定める復興・創生期間が平成 28 年度から 32 年度までの 5 年間であるため、新たな街区を建設するにあたり、区画整理事業に取り組んでいるものの、土地の持ち主が不明になっていたり、震災を機に県外に移転されていたりする場合も多く、区画整理のための承諾書の受領に苦労されているとおっしゃっていた。そのような状況の中でも、陸前高田市復興対策局では防災集団移転促進事業として、住宅再建希望者に対する支援金制度を設けている他、災害公営住宅として 11 団地の建設が終了し、入居者を募集している段階である。また、震災時には国道 45 号線が水没し、自動車で避難しようとしていた多くの方が被災したことを受け、防災道路網整備促進事業として、国道 45 号線や市街地を走る道路のかさ上げの他、三陸縦貫自動車道に接続する西・中央・東の 3 本の防災道路網を建設中であるとおっしゃっていた。

時間の関係上、他の基本方向及び事業に関する説明を聞くことはできなかったが、中心市街地のかさ上げが完了し、新しい陸前高田市立図書館やスーパーマーケットが建設され、買い物に訪れる市民の自動車が行き交うなど、これまでにない光景を目にすることから、政府による復興支援事業費を使うことができる平成 32 年度までに震災復興のために事業が急ピッチで展開されていることが感じられた。

## 3. 「ケア（ケアリング）」と道徳教育

### 3. 1. ESD におけるケアリング

五島ら（2010）はイギリスのサスティナブル・スクール政策において、持続可能な開発に不可欠な概念として挙げられている「ケア（ケアリング）」について言及している。ケアは自身へのケア、相互のケア、環境へのケアの三つの要素から成り立つ。自身へのケアとは、自己中心主義をやめ、自分の健康や命を大切にする価値観のことである。相互のケアとは、人種などに関係なく、他者を思いやり、重んじる価値観であり、環境へのケアとは身近なものから地球規模の環境について大事にする価値観であると紹介している。<sup>2</sup>

また曾我（2014）は、ESD におけるケアは、「自分自身と社会を変容させるための学び」として重要なものと主張している。環境をケアすることで、環境の「傷つきやすさ」を知り、自己対話や内省を行い、自己や他者の「いのち」の大切さについて知る。そういった過程が、自己変容を促し、外の世界とつながり、社会全体的な変容へとつながっていく。<sup>3</sup>

### 3. 2. 道徳教育と ESD

小嶋（2017）は、ESD の視点より、自他との関係の中で事実をとらえ直し、他者を受容しつながりを回復させ、

社会的な問題の解決にむけて他者とともに行動することを学ぶ道徳教育の重要性を主張し、シチズンシップ教育を提案している。<sup>4</sup>子どもたちが身に付けるべき社会的リテラシーとして、ルールを遵守するなどの受動的な態度だけではなく、他者のニーズに気づき、それに応答し、共感的に理解することや、社会の仕組みを変えようとする態度の形成を挙げており、ESD において道徳的な行為が求められているとしている。道徳教育の要素を取り入れた ESD の授業実践はまだ数少ないが、以上の主張により、道徳科における ESD 教材を提案する意義を見出すことができた。

### 3. 3. ケアの視点による道徳教育の捉え直し

小嶋は前述した「他者のニーズに気づき、それに応答し、共感的に理解する」態度を「ケア」としている。また地球市民の育成の視点から、学習指導要領に示される道徳教育の4つの内容領域をとらえ直したものを示している。これらを前述したケアの視点からもとらえ直したものが表2である。

表2 ケアの視点を加えた4つの領域

道徳	シチズンシップ教育	ケアの視点
1 主として自分自身に関する事	セルフエスティームの育成と個の確立に関する事	自身へのケア
2 主として他の人とのかかわりに関する事	他者を共感的に理解しケアし、ケアされる関係を構築すること	相互のケア
3 主として自然や崇高なもののかかわりに関する事	自然との共生や生かされている自分の実感に関する事	環境へのケア
4 主として集団や社会とのかかわりに関する事	社会参加や参画の意欲と行動に関する事	相互のケア 環境へのケア

以上より、道徳教育には、ESD の概念の一つであるケアの視点が含まれていることが分かった。さらに ESD で求められる態度や行動は、道徳教育で求められるそれと重なる点が多い。これらの気づきより、ケアの視点を取り入れた道徳科における ESD 教材を提案する。

### 4. 聞き取り調査について

今回の調査では、陸前高田市民を中心に、様々な人々に聞き取り調査をすることができた。その調査結果を以下に示す。

・昼間は交流プラザでみんなと過ごすことができるが、夜になると涙が出る。私が助けられなかったせいで母は亡くなり、私が姪を陸前高田に呼んだせいで姪も亡くなり、姪の息子たちは母親を失った。そんな私が生きていて申し訳ない気持ちになる。(災害公営住宅の住民)

・私だけ生きて楽しい思いをしているのだろうかと思いが、今は私が幸せになることが亡くなった家族を安心させることにな

ると思えるようになってきた。(同上)

・公営住宅婦人会の部長を任されてから、自分の役割を持って活動に参加するようになった。交流プラザには同じ境遇の人がたくさんいて、誰かと話すことで気が楽になる。(同上)

・うちは祖母と夫でまだよかった。遺体安置所で子どもを探す母親の姿は見ていられなかった。子どもが死なない防災教育をしてほしい。気仙小学校、中学校では、たまたま先生の機転で全員助かったが、たまたまでは困る。(同上)

・夫を亡くし、生きることに力が入らなかった。交通事故にあったとき「このままお父さんのところへいけるならいい」とも思ったが、夫がまだ来るなど言っているように感じた。泣いてばかりいるより、笑っているほうが自分の夫も喜ぶと少しずつ思えるようになった。(地域ケアコーディネーター)

・地震発生後5日後に夫の死体が見つかった。5日も経っているのに死後硬直が始まっておらず、指から指輪を抜いた途端に始まった。「私のことを待っていてくれたんだ」と感じた。今でも夫は私の側で見守ってくれていると感じている。(同上)

これらのインタビューを通して、次のことに気づいた。

・同じ境遇の被災者が交流プラザ等で集い、想いを共有することで気持ちが楽になる。

・他者を思いやる気持ちから自己へのケアが生まれる。

・亡くなった方を思うと、残された方が幸せに生きていくことが一番大切である。

これらの気づきを活かし、次章にて「心の復興」そして「ケア（ケアリング）」の要素を取り入れた道徳科での ESD 教材を提案する。

## 5. 学習活動の概要

### 5. 1. ねらいとする価値について

6年半前の東日本大震災について取り上げ、そのような過酷な状況の中でのケアについて考えを深める。東日本大震災では多くの人々が被災し、家族を失った。そんな状況の中で、被災者はどのように生きてきたのかをロールプレイを通して考える。ロールプレイでは、自分との対話や他者の立場に立ち、他者と共感的に対話することによってモラルジレンマを体験させる。ケアには、まずは共感的な対話が必要不可欠である。児童が体験的にそれを学び、実践できることを期待する。また、自身へのケア、相互のケア、環境へのケアにおけるバランスの大切さを知り、自分のすべきケアの方法を考える。こういったケアについては震災発生後に限定したのではなく、最後には児童にとって身近な状況に置き換え、どうすればケアを日常生活で実践できるかを考えさせる。そこで、どんなときでも自分、他者、環境に対する思いやりが大切であると気づかせ、全ての人、ものに対して普段の生活においても思いやりの気持ちを持つ姿勢を育てる。

### 5. 2. 教材について

陸前高田市災害公営住宅内の中田交流プラザで3人の方々にインタビューを行った。心打たれるお話ばかりで

あったが、被災後の心のケアに着目し、2つのエピソードに焦点を当てる。1つは亡くなった家族に対し「私だけ生きて楽しい思いをしているのか」という自責の念から「私が幸せになることが亡くなった彼らを安心させることになる」という心の変化である。もう1つは、同じ境遇の人が集まることで「ここに来てよかった」（ここに来るまでに5回引越されている）と思えるようになったことである。自分のことばかりでなく、他者に目を向け他者をケアし、幸せになっていいのだと伝えることが、実は自分自身のケアにもなっているという今回のインタビューでの気づきを基に、ESD教材を作成した。

5. 3. 本時について

(1) 主題名

東日本大震災後の人々の生き方について考えよう

(2) 内容項目

B 主として人とかかわりに関すること

(7) 誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること

(3) 使用する教材

陸前高田市での被災者へのインタビュー内容とそれを基にしたロールプレイ

(4) 展開の概要

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>①東日本大震災発生時の陸前高田市の被災状況について知る。</p> <p>②震災後6年が経過した現在の被災地の状況とそこに住む人々の心情、状況について知る。</p>	<p>○被災地の写真をスクリーンに映し説明する。</p> <p>○被災者の方々へのインタビューを伝える。子どもたちが具体的に想像できるように留意する。</p>
	被災した方々の心情を、共感的に理解しよう。	
展開	<p>①ロールプレイの人物の状況から、その人物の心情について考え、ワークシートに書き込む。</p> <p>②考えた心情を踏まえて、ペアでロールプレイを行う。</p> <p>③演じてみた感想をワークシートに記入する。</p> <p>④演じてみた感想と、どのような対応をし合ったのかをグループで共有する。</p>	<p>○それぞれの人物が置かれている状況を具体的に読み取るように指示する。</p> <p>○机間指導で、子どもたちがどのような言葉かけをしているかを確認する。</p> <p>○行動の理由に注目するように伝える。</p> <p>○他のペアと同じ点、違う点に注目するよう指示する。</p>

終末	<p>①ロールプレイでの対応についてクラス全体で共有する。</p> <p>②共有された意見より、ポイントをまとめる。</p> <p>③毎日できる思いやり行動について個人で考え、クラス全体で共有する。</p>	<p>○グループごとに話し合った対応の仕方を板書する。</p> <p>○自身へのケア、相互のケア、環境へのケアに対応させてまとめる。こういった対応は震災直後のみ必要なのか、子どもたちに問いかける。</p> <p>○ワークシートを回収する。</p>
----	---	---

(5) ロールプレイに用いるワークシート例

状況：震災から一週間後、初めて再会し、各々の状況を報告し合う。

<p>太田さん（女性・75歳 無職）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>被災前は陸前高田市で姉と二人暮らしだった。体が弱く、病気になるやすい。</li> <li>たった一人の姉が一週間行方不明のまま、遺体安置所を回り探したいと考えているが、誰に頼ればいいのか分からない。</li> <li>避難生活が始まって、一週間原因不明の高熱が続いている。</li> <li>避難所の保健室では対応しきれず、病院に行くように言われているが、歩いて行ける距離に病院はない。さらに車がなくて、運転もできない。</li> </ul>
---

<p>坂本さん（男性・22歳 大学生）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>被災前は陸前高田市で祖母、父、母、弟と5人で暮らしていたが、祖母を津波で亡くし、家は全壊した。</li> <li>可愛がってもらった祖母の死をまだ受け入れられずにいる。</li> <li>人が多いところが苦手で、家族の車の中で避難生活を送っており、狭い空間にストレスを感じている。</li> <li>被災前は太田さんの隣の家に住んでおり、特に祖母と太田さんの年齢が近いこともあり、仲が良かった。</li> </ul>
---

●問1 あなたが演じる人は今どんな気持ちだろうか。解答例

<p>太田さん</p> <p>行方不明の姉が心配。遺体安置所に探しに行きたい。病院にも行かなければならないが誰にも頼めない。坂本さんになら頼めるかもしれない。</p>
---

<p>坂本さん</p> <p>家が全壊し祖母も亡くし悲しい。避難所生活がストレス。太田さんのことを助けてあげたい。</p>
---

●問 2 演じた感想を書こう。

解答例

太田さん  
頼ってよかった。少し安心した。姉が亡くなったことはショックだった。坂本さんも祖母を亡くしている。悲しいのは私だけではない。

坂本さん  
太田さんに喜んでもらえてよかった。  
太田さんの姉が亡くなり、身寄りのない太田さんとこれからも助け合っていかなければならない。

●普段の生活でできる思いやり行動を考えよう。

解答例

バスでお年寄りに席を譲る。  
兄弟が、まだできないことを手伝う。  
友達が困っていたら、相談したり一緒に考えたりする。

6. まとめ

平成 29 年度陸前高田市文化遺産調査の一環として、被災者の方へのインタビューをもとに、ケアの視点を取り入れた道徳科における ESD 教材を提案した。防潮堤や区画の整備が進められ、商業施設や図書館などが建設されており、物質的な復興は着々と進んでいる一方で、被災者の方々は、今もなお震災の記憶に苦しみを感じられており、彼らの心の復興にはまだ時間が必要だ。しかし、災害公営

住宅などでの被災者の方々へのインタビューから「泣いていても仕方がない。自分が幸せになることで、亡くなった人もきっと喜んでくれる。」「周りの人が自身も大変な状況の中、声をかけて助けてくれた。少しずつ前を向けている」といった声も見られた。このことから分かるのは、被災者の方々の心の支えをしているのが、災害公営住宅での住民同士の声の掛け合いや、避難所での助け合いということである。この自分自身も大切にしつつ、他者を思いやり行動をする態度を、児童生徒に身につけてほしいと思う。ロールプレイを通じてこの態度を養うことで、緊急時だけでなく、いつでも利他的行動ができるようになるだろう。このことが災害時にもスムーズなコミュニティ形成にも役立ち、心の防災につながるのではないかと考える。

注

- 1) 日本地質学会,  
[http://www.geosociety.jp/uploads/fckeditor/geoFlash\\_img/no147/no147-1.gif](http://www.geosociety.jp/uploads/fckeditor/geoFlash_img/no147/no147-1.gif), 2017 年 11 月 25 日.
- 2) 五島敦子・関口知子, (2010), 未来をつくる教育 ESD - 持続可能な多文化社会をめざして, 明石書店, pp.104-105
- 3) 曾我幸代, (2014), 「持続可能なコミュニティと自己変容をもたらす教育」, 博士学位論文, 聖心女子大学, pp. 59-60, 162-168.
- 4) 小嶋祐伺郎, (2017), 「地球市民意識を育む道徳性育成の実践的研究—多文化共生社会における市民性の育成の視点から—」, 次世代教員養成センター研究紀要, 奈良教育大学, pp.62-63.